

ソウル大学校奎章閣所蔵の朝鮮製 『海東三国図』について

川村博忠

- I. はじめに
- II. 所蔵先での当該絵図についての解説
- III. 図面の構成と内容の概要
- IV. 中国・朝鮮・琉球の図示内容
 - (1) 中国
 - (2) 朝鮮
 - (3) 琉球
- V. 日本図についての検討
 - (1) 図形
 - (2) 内容
 - (3) 朝鮮より日本への海路
 - (4) 端書
 - (5) 寺島良安『和漢三才図会』と内容の比較検討
- VI. むすびにかえて一本図の成立と朝鮮の東アジア地理観の変化―

I. はじめに

平成12(2000)年にソウルにて開催された国際地理学会議へ参加した折、ソウル大学校の奎章閣(Kyujanggak)¹⁾を訪ねたところ、日本を含む東アジアの大型手書き彩色図が展示されているのを観て目を見張った。中国大陸の沿海部から朝鮮半島へ続き、その東南には海を隔てて日本と琉球が画かれている。とりわけ驚いたのは画かれる日本列島の大きさと地名記載の豊富さであった。一般に見られ

る朝鮮製の古地図では朝鮮半島に比べて日本ははるかに小さく画かれるのが通常である。それに対して展覧の図では日本が朝鮮国の倍以上にも大きく画かれていたのである。

帰国後にこの地図の写真版が入手できないかと故李燦先生に手紙を出したところ、遠からず大きく引き伸ばした当該図の印画写真が大人の背丈ほどもある円筒に巻き込んで送られてきた。礼状とともに本図に画かれた日本図がいかなる種類のものであるかを検討して、いずれその結果を報告することを李先生に約束していた。しかし、それを果たさないうちに先生は他界されてしまった。写真で地名など記載内容を調べると、西日本付近は文字が比較的鮮明に読み取れたが、東日本ではピントが甘くて文字の判読にてこずり作業を中断していたところ、李先生の他界もあって本図の検討を放置する結果になっていた²⁾。

ところが、2010年9月に国絵図研究会のメンバーが誠信女子大学校の楊普景教授のお世話にて奎章閣で李氏朝鮮時代の古地図調査をおこなない、懸案の東アジア図を直に閲読することができた。本図は朝鮮王朝時代成立の興味ある地図であるのでその概略を紹介し、本図成立の背景について考察してみたい。

II. 所蔵先での当該絵図についての解説

該当の絵図はソウル大学校奎章閣所蔵の

キーワード：奎章閣，李氏朝鮮王朝，海東三国図，鄭厚祚，日本図

『海東三国図』(奎15506番)であって、寸法は縦248.0×横264.4cmの大型手書彩色図である(図1)。筆者が最初に展示中のこの絵図を観たときにはハングルによる解説文が読めないため、館員に相談したところ短い英文による解説³⁾のコピーを入手できた。

その解説によると、本図は18世紀末に民間の地図製作者であった鄭厚祚(Cho'ng Hu-jo, 1758~1793)によって作製されたものと推定される。彼は18世紀中期にはじめて縮尺を取り入れて作られた鄭尚驥の『東国地図』を基

にして朝鮮全図に改良を加え、19世紀に朝鮮地図学の頂点を究めた金正浩の『大東輿地図』へ橋渡しの役割を担ったと考えられている。本図の朝鮮部分は縮尺を用いて作図されており、図形はきわめて精確である。図面の余白に中国主要地の緯度と経度の数値を列記していることは、18世紀末に朝鮮でもこのような外国の測地情報を得ていたのであり、朝鮮の地図学的水準の高かったことを語るものである。以上のような解説であって、日本図については何ら説明されていなかった。

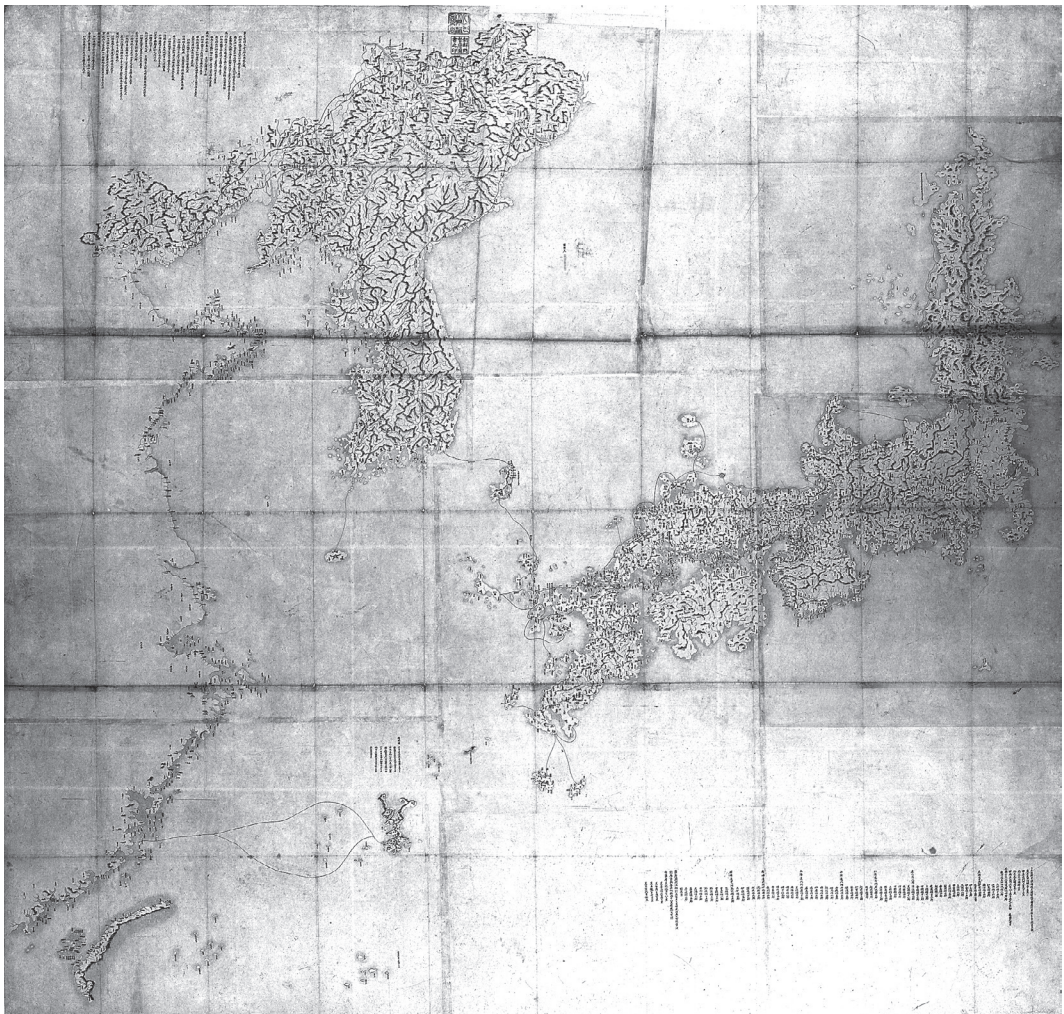


図1 『海東三国図』 ソウル大学校奎章閣所蔵, 248.0×264.4cm

また、その後2004（平成16）年に奎章閣は保管する朝鮮王朝時代の朝鮮全図（八道図）のほぼ全部47枚を複製し⁴⁾、各図に簡単な解説を付しているが、残念にも当該『海東三国図』は朝鮮図部分のみの復刻であった。その解説によると、本図は朝鮮と日本および琉球の3国のほかに中国の海岸線を画いた地図である。従来の日本と琉球を含めた地図では画かれる国の大きさと配置が不正確であったが、本図ではそれらがほぼ正確である。朝鮮の東方海中には百里尺の表示がみられるので、朝鮮部分は鄭尚驥の朝鮮全図に基づいているように考えられる。さらに中国の海岸線の形態も現存するどの中国図よりも精確であって、この図形がいかなる資料に基づくかは今後の検討課題である。

本図の成立年代については朝鮮図中に記される地名を調べると、慶尚道には1767年に改名された山清があり、忠清道には1776から1800年まで使っていた尼城が出ている。京畿道には1795年に始興と改名された衿川が旧来の名称で記されている。平安道には1776年に改名された楚山が出ており、咸鏡道では利城が1800年に利源と改名されているが、本図では変えられる前の地名である。また咸鏡道ではほとんどの郡県の名称が記されているのに、1789年に新設された長津は記されていない。以上のことから、この地図は1776～1789年の間に作製された可能性が高いと解説されている。

以上が所蔵先による本図についての解説のすべてである。したがって製作者と推定されている鄭厚祚なる人物について、さらなる情報が得られないかと朝鮮地図史に関係する諸種の文献を調べたところ、同人は鄭尚驥の朝鮮全図を修補した図を作製していて、その地図は「海州本」と呼ばれていたことを知り得た⁵⁾。鄭尚驥の『東国地図』は、原図をそのまま模写して地名の変更などを修正しただけの河東鄭氏一族の原図本系列と、図形に一部

修正を加えた鄭喆祚・鄭厚祚ら海州鄭氏一族による修正本系列をもって区別されるという。

以上のごとく知り得た説明はいずれも本図に含まれる朝鮮全図とその製作者と推定される鄭厚祚なる人物についての情報のみであって、筆者が関心を寄せる肝心の日本図についてはまったく検討された様子はなく、当該『海東三国図』全体についての説明は何ら得られなかった。ただ内容から推定される本図の成立年代と製作者の生存期間には矛盾がないので、本図が鄭厚祚によって18世紀末に作製されたことは間違いなからう。

Ⅲ. 図面の構成と内容の概要

『海東三国図』は仮題であって図題はなく、図示範囲は中国沿海部から朝鮮半島全域、それに日本と琉球を含めている。中国・朝鮮・日本・琉球の4か国を範囲とする朝鮮王朝時代の地図としては初期の頃の「天下輿地図」系地図が代表的であって、いずれも朝鮮国に比して日本は通常小さく画かれる⁶⁾。しかし本図に画かれる日本は格段に大きくて形もおおむね整っており、4か国の配置も実状に近い。中国と朝鮮の輪郭はきわめて精度がよく、半島の東側海中には百里尺⁷⁾が図示されていて、朝鮮部分は縮尺を加味して画かれたことを語っている。

ただ本図では4か国のうち中国だけは全体を画くのではなく、朝鮮との陸続きの中国東北地方、つまり遼寧・吉林・黒龍江の東三省および河北省の東部までを含めるだけで、清の皇都（北京）が西の端である。渤海・山東半島以南は沿海部を南下して東シナ海沿岸の江南地方（浙江省・福建省など）まで海岸線の輪郭をたどるだけである。福建省と相対する台湾は台湾海峡をはさんで細長く弓状に曲がった形を呈している。朝鮮半島の東南部には日本が大きく横たわり、本州の越後新潟～会津若松付近から北向きに屈折するように奥

羽地域が北方へ長く伸びている。その北西端に未確認の蝦夷島が小さく三角形のかたちで示されている。日本の北端は広い日本海（韓国では東海）を挟んで中朝国境付近の沿岸と相対している。三陸海岸と房総半島が地図の東限をなしている。九州南端の薩摩から海を隔てて西南方向に奄美群島、さらにその南方に琉球がある。

中国東北部、朝鮮、日本および琉球では山地の描写が個々の山を描くのではなく、朝鮮製古地図によく見られる山地を連ねて描く朝鮮式「山岳投影法」⁸⁾で表現されている。全体に山系と水系の描写が詳細である。海岸線の出入り、沿岸の小島なども細かく描かれている。地勢の表現が細密であるのに比較して、人文的内容では交通路が陸路・海路とも朱線を引いて明瞭に図示されるものの、朝鮮では地名の記載がほとんど街道筋と沿海部に限られている。ただ中国東北地方と日本では内陸部を含めて地名の記載は濃密である。

図面の西北部余白、中国東北地方の上部には中国20数か所の地点についての緯度（北極高度）と経度（北京偏度）の数値を示す端書がある。その対角的な東南部余白、日本図の下部には日本六十余州の各州（国）別郡数が列記されている。そのほか琉球についても、図示位置の近くに簡単な地誌的説明が付記されている。

全体を一覧すると、本図は朝鮮王朝の都である京（漢城）を起点にして、隣国の中国清の皇城（北京）と日本の江戸へ至る交通ルートの図示が主要素であるような印象を受ける。中国とは陸続きであって清への使臣の往来する北京への行路は、いわゆる「燕行使」道⁹⁾であった。海を隔てた日本の江戸へ至る朝鮮通信使の順路は陸路と海路をつないでいた。琉球への海路は朝鮮からではなく、中国の福建省福州付近の湊から朱引きされている。

IV. 中国・朝鮮・琉球の図示内容

(1) 中国

既述のごとく、本図は朝鮮半島と陸続きの中国東北地方（旧満州、以下満州と表記する）、つまり遼寧・吉林・黒龍江の東三省および西は河北省東部までの地域が朝鮮との国境を越えて画かれている。清の皇城（北京）は朝鮮の京（漢城）から通じた陸路の終点で、それより先の中国内は空白で路線の描写はない。渤海の湾口に対峙する遼東・山東両半島と湾奥の形状はほぼ実状の姿を呈している。遼東半島の沖合には長山（チャンシャン）群島の18個の島々が逐一島名を記して図示されている（図2）。

渤海の湾奥から山東半島を経て南の福建省に至る黄海・東シナ海の沿岸は海岸線の輪郭を画き、沿岸部に若干の都市を示すだけであるが、入江と浦々の地形とりわけ沿岸に散在する小島の描写は精細である。台湾は海峡をはさんで福建省と相対し、細長く弓状の形態にて画かれている。前面の台湾海峡には無数の群島からなる澎湖（ポンフー）諸島がそれぞれに島名を記して細かく図示されている。

朝鮮の京より出る陸路は北西へ進み、平安道の平壤・安川を経て義州の鴨緑江（ヤールー川）で国境を越え、要地の盛京（現、遼寧省瀋陽、旧満州の中心都市）を経て清の皇城へ至っている。この陸路は「燕行使」と称した朝鮮使節が北京へ赴く路線であった。その沿道には集落が赤色と青色で塗り分けた○印で図示されていて、赤色が宿場など要地とみなされる。盛京からは陸路が三筋に別れ、北京への路線を離れる二筋は北東方向に別々に進み、途中で一筋に合流して吉林・黒龍江省方面へ至っている。北京へ向かう路線は途中で山海関を通過する。同所は西から延びている万里の長城の東端である。山海関からは万里の長城に連結して東北地方に構築された柳条辺牆¹⁰⁾が、長城とは図柄を異にするも



図2 『海東三国図』部分，中国東北部（満州）

のの防御施設らしく黒太の刻み線で明瞭に表現されている。

柳条辺牆は盛京を中心に遼寧省の東半を囲むように遼東半島根もとの鳳凰城にまで達しており、その途中の開原付近で分岐した辺牆は盛京から辺境地帯へ延びる道筋の外側、つまり内モンゴルとの境界に沿って吉林省舒蘭県の松花江を越える付近にまで構築されている。この柳条辺牆は清がモンゴル人、朝鮮人を阻むために1653年頃から約30年間に及んで構築したもので、古くは明が女真族（後金）を阻むために築造していた遼東辺牆の外側に拡張されたという¹¹⁾。

清朝は建国後も自らの故地である盛京を中心とする満州の地を神聖なものと定めており遼寧，吉林，黒龍江のそれぞれに將軍を配置していて、3將軍の支配域が東三省の起源だという。北京に次ぐ副都格の盛京は後に奉

天，瀋陽と時代によって名を変えている。後金の古都の興京（現，遼寧省撫順）は、北京および盛京と同じく四角形を黄色で塗りひときわ大きく図示されている。この旧満州族（古くは女真族）の故地である満州では、地名や山・川などの名称記載が朝鮮国内よりも充実している。

中国東北部の上部余白には先述のごとく寧古塔（ニングダ，現黒龍江省牡丹江市寧安）・盛京・山海関（万里の長城の東端）・黄河河口・長江河口・福州古関・台湾本島など23地点の北極高度（緯度）と経度の数値を列記している。経度は北京を通過する子午線を基準経度と定めていて、その基準線から各地の東西偏度を測定したものである。次にその端書の冒頭部分のみを示してみる。

寧古塔訳為金上都本肅墳之域

北極出地四十四度半，北京偏東十三度強
南豆滿江北岸

北極出地四十三度，北京偏東十四度弱
東南鳥兒滾山海岸

北極出地四十二度半，北京偏東十四度半
鳥喇渤海之上京遼遷女真於此謂熱部又日回
霸館

北極出地四十四度半強，北京偏東十度半
南白頭山

北極出地四十二度，北京偏東十一度強
西南九連城

北極出地四十度強，北京偏東八度強
盛京本挹婁之地 皇明之瀋陽中衛

北極出地四十二度弱，北京偏東七度強
西南旅順海口

北極出地三十八度四分度之三，北京偏東
五度
(以下省略)

寧古塔は牡丹江中流域にあって、清の満州
東部統治の拠点としての役割を果たしてい
た。列記される23か所の測地点はいずれも本
図に画かれる中国の範囲内にある。

本図の端書に示されるこのような緯度・経
度の観測値は、18世紀初頭在華イエズス会士
らによる中国での測量を想起させる。康熙帝
の命を受けて白進（ブーヴェ）・雷孝思（レ
ジス）らは1708年より10か年余を費やして、
中国本土と辺境の約700か所で緯度・経度の
天測を実施した。その成果に基づいて作製さ
れた新地図が1717年に上呈され、それを皇帝
は『皇輿全覧図』と名付けたという¹²⁾。

筆者の手元には幸いにもウイーン国立図書
館に所蔵される銅板手書き入り『皇輿全覧
図』の写真¹³⁾があるので、本図の中国沿岸
部をそれと照合したところ図形がほぼ一致し
た(図3)。台湾を弓状に画く形状も同じで
ある。本図に画かれる中国部分はまさしく
『皇輿全覧図』に準拠しているのである。満
州地域の図示内容が朝鮮に比較してはるかに

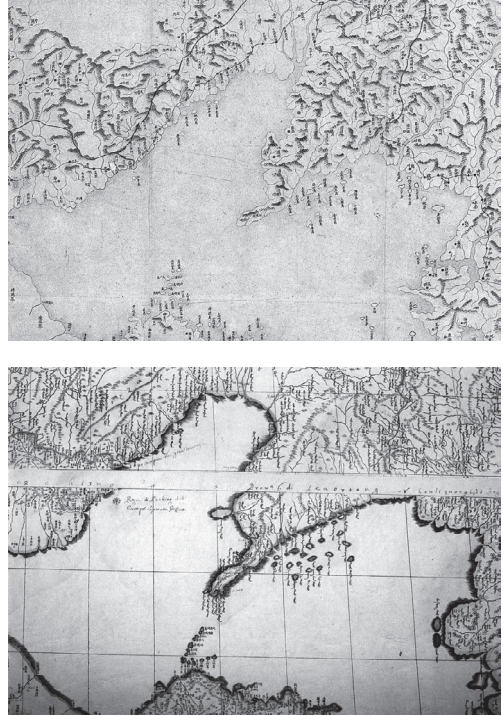


図3 山東半島付近の比較
『海東三國図』(上)と『皇輿全覧図』(下)

充実している理由も理解できる。端書に記す
23地点の測地度は康熙帝の測地事業によって
測定された箇所の一部とみなされる。

『皇輿全覧図』には朝鮮半島をも含めてい
るが、本図の朝鮮の図形はそれとは明らかに
異なっている。自国の朝鮮は作製者自身が製
図した朝鮮全図を基にして、それに中国の東
北部と東部沿岸の輪郭のみを『皇輿全覧図』
から取り込んだものとみなされる。

(2) 朝鮮

朝鮮半島の図形はよく整っており、鄭尚驥
の「東国地図」タイプ図¹⁴⁾に図形がほぼ近
似している(図4)。東海岸の沖合には鄭尚
驥の地図にて見られるいわゆる「百里尺」の
表示があつて、本図の朝鮮部分は縮尺を加味
して作製されたことを語っている。図面で百
里尺の長さを計ると3.6cmであるので、日本

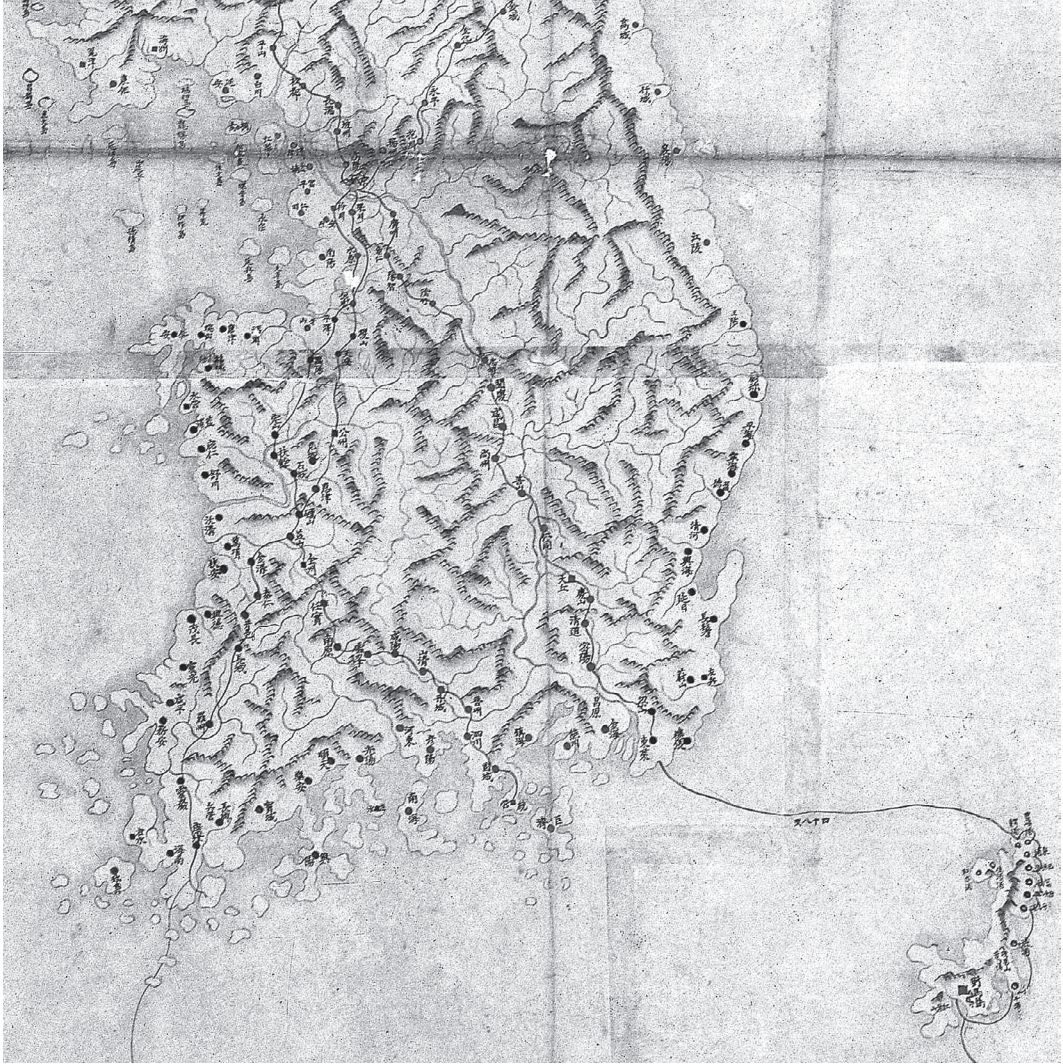


図4 『海東三国図』部分， 朝鮮国南部

の里数で換算すると本図の朝鮮部分は縮尺おおよそ130万分の1にての作製ということになる¹⁵⁾。

李氏朝鮮時代の朝鮮全図では一般に、山系と河川網の描写は詳細であるのに対して人文的情報は希薄であって、本図も表面的には同様の印象を受ける。交通路のうち陸路は主要街道に限られ、海路は半島南端から済州島への船路を示すだけで、その外には国内の沿岸航路はまったく見られない。集落は街道筋と

海岸筋にだけ図示されていて、寺院や仏閣の描写は皆無である。とくに平安・咸鏡・黄海・江原道の内陸部では山系と水系による地勢の脈略を見るのみである。

ところで本図の人文景観の主要な構成要素は、国土を南北に縦断する街道とその路辺集落および沿岸集落の立地である。そして注意深く観察すると、とくに集落は規模および機能を分けて図示されていて、本図の人文情報は必ずしも希薄とは言い切れない特徴を有し

ているのである。

国都はやや大きな楕円形で表し、黄色を塗り「京」と記している。集落のうちとくに主要な都市である義州（平安道）、平壤（黄海道）、公州（忠清道）、全州（全羅道）、大丘（慶尚道）、咸興（咸鏡道）の6市だけは□印で示し、一般の集落は○印で表している。一般集落のうち地方行政中心地の邑治および駅や場市など交通集落（路辺集落）はすべて赤○印であるのに対して、沿岸部の集落は多くが黒○印である。この沿岸集落の色分けを長森美信の論文¹⁶⁾にて図示される邑治と浦口集落の類別と照合するとほぼ一致する。本図では沿岸の浦口集落を黒色で示し、邑治の赤色と塗り分けているのである。また沿岸集落のうち一部には○印の下地を赤色で塗り、その上に黒点を重ね塗りしている集落も見受けられるが、これは邑治を兼ねた浦口集落であると判断される。

本図の主要内容である街道は、国都の京（漢城）を基点にして北へ2本、南へ3本通じている。李朝時代には国の指定した官道は国内に6～10路線が存在し、いずれも「大路」と呼ばれて、それぞれの名称がついていた¹⁷⁾。大路は漢城の東西南北の城門を起点にして、国内を方向別に進行してそれぞれ国土の最端地を終点にしていた。中央集権国家の李朝ではこれら大路を主軸にして首都と全国の邑治（地方行政都市）が結ばれていたという。

轟博志氏の示す官道の分布図¹⁸⁾を参考にすると、本図に図示される5本の街道はいずれも大路である。京都より北へ向かう2本の街道のうち西側のルートは黄海道の平山、平安道の平壤を経て国境の義州へ至る「義州大路」である。この路は鴨緑江を渡って清の皇都へ至る街道に続いている。中国への使臣行路の「燕行使」道である。京より東北方向に進み、内陸を横断して咸鏡道の安辺で日本海（東海）岸へ出て、沿岸を北上して国境の慶

興（現在の羅先）に至っているのが「慶興大路」である。

南へは2本の大路と途中から分岐する別大路を加えた3本の大路、いわゆる「三南大路」が半島南端に至っている。2本のうち東側のルートは京畿道の広州、忠清道の忠州、慶尚道の聞慶・大丘を経て東萊（釜山）へ至る「嶺南大路」であって、南端の東萊から対馬・壱岐を経て日本へ至る海路へと連結している。西側を南下するルートは「海南大路」である。この大路は京畿道の水原を経るとすぐに振威で二筋に分かれて進み、全羅道の益山で再び合流するが、同所で大路は最終的に東西に分離する。本筋の海南大路は西をそのまま南下し、羅州を経て半島西南端の康津に至り、そこから済州島への海路と連結している。他方、海南大路と益山で別れた別路は「統營別路」であって東南方向に南下し、全羅道の南原、慶尚道の普州・固城を経て半島南端の統營に至っている。その前面には巨済島が横たわっている。

(3) 琉球

琉球国は朝鮮半島の真南にあって位置は正しく示されている。図形は17～18世紀に朝鮮で普及していた「天下図」系地図帖に広くみられる蝸牛型を脱してはいるものの、北西部の本部半島の突出が大き過ぎて全体がY字形を呈しており実態から遊離している。国都の首里を「京」と表現している。国内に陸路は示されず、集落は北部では国頭、大宜味、本部、今帰仁など南部では玉城、豊見、浦添、西原など全部で28箇所を赤色の○印で示して地名を記している。本島の南方に海を隔てて先島諸島が6つの小島の群島として画かれている。

既述のように琉球へは福建省の福州付近の港から海路が示されている。その航路は途中で尖閣諸島の南北両側を迂回し、二筋に分かれるが琉球の近くで再び合流して那覇の湊へ

至っている。琉球国図の上部には下記のような簡単な端書が付記されている。

琉球国 土音屋其惹膺時国分為三、永樂年間中山王尚巴志統合分置三省、北極出地二十六度二分三厘、福建偏東差八度、海面直線相距一千七百里、海路相距為三千里、地形東西狹寬處可數十里、南北長四百四十里

琉球国は三山（北山・中山・南山）に分かれていたのを、明の永樂帝のとき中山王尚巴志によって統一された。位置は緯度が北極高度26度2分3厘、経度は福建省から東へ3里である。福建省からの直線距離が1,700里、海路は3,000里。国土は東西に狭くて広い箇所でも數十里、南北は長くて440里に及んでいる。

この端書にみられる北極高度と福建よりの偏度の記載は康熙帝による測地が琉球にも及んでいたことを思わせる。

V. 日本図についての検討

(1) 図形

朝鮮製古地図に画かれる日本の図形はわが国の行基図に依拠するものがほとんどであるが、本図に描かれる日本は行基図からは完全に脱して、まさしく近世の日本図である(図1)。東北地方の奥羽が関東からほぼ垂直に細長く立ち上っているのが特徴的である。全体を概観すると本州・四国・九州の配置に問題はなく房総・伊豆・紀伊・能登など各半島の形態も实际的であって、この日本の図形は全体としておおむね整っている。利根川河口付近に「日本東限」、紀伊半島南端の串本の潮岬に「日本南限」と記しているが、これは本州の東と南の限界を示しているのだろう。

行基図に依拠して画かれる日本図では、日本の周辺海域に空想的な島々を散在させるのが一般的であるが、本図に画かれる離島はす

べて実在の島ばかりであって架空の島はいっさい見出せない。島前・島後に分離する隠岐諸島の配置、佐渡島および種子島・屋久島の図形もおおむね整っている。対馬は朝鮮製地図では朝鮮半島に近接して画かれることが多く、その図形は『海東諸国紀』¹⁹⁾の「対馬之図」のような馬蹄形を踏襲していた。だが本図では対馬を半島から遠く離して画いていて、図形も浅茅湾らしき湾入がみられ、舟志浦（船越浦か）の地峽をもって南北に細長い実際の形態に近づいている(図4)。

ただ日本の図形を少し細かく眺めると、東北地方の狭小さが目立っていて本州北端での変形が著しい。下北半島と津軽半島に抱かれる陸奥湾は実際には湾口を北に向けているが、本図では西に向けている。湾口の先に蝦夷島が三角形のかたちで図示されていて、「松前即蝦夷之入口湊也、倭之注成、猶釜山之有倭館」と注記される。その他の目立った変形箇所としては、①山陰・山陽の中国地方が細くなり過ぎている、②四国の室戸・足摺両岬の突出が不自然なため土佐湾の形が明確でなく、四国全体の図形をゆがめている、③九州の南半分が細長く西に傾いているため、九州全体の図形がややゆがめられている。

以上のように細かく指摘すれば難点は少なくないが、朝鮮時代に画かれた日本図としては比類のないこのような日本図が何を拠りどころにして作図されたのであろうか。江戸幕府の編んだ官撰日本図ばかりでなく、流泉図や赤水図などわが国で出版された民間の刊行日本図を探しても本図に合致する図を見出すことはできない。ただ強いて類似図を探すと寺島良安の『和漢三才図会』²⁰⁾に載る「大日本国之図」が幾分似ている(図6)。その類似の特徴は奥羽が越後の新潟付近で直角に屈折して垂直に上へ大きく伸びている点である。

もちろんこの図は刊行本の版図であるから頁面に収まるように、奥羽を屈折させた可能性も予想される。しかし別に寺島良安自身が



図5 『海東三国図』部分、日本国の関東地方

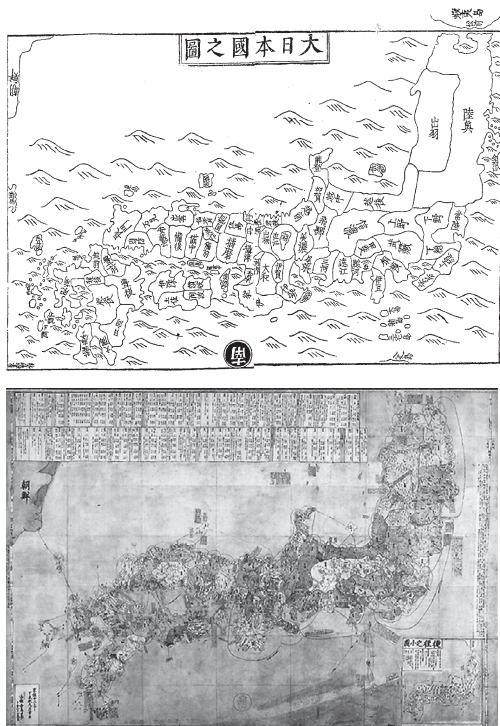


図6 日本図の図形比較 『和漢三才図会』所収の「大日本国図」(上)と神戸市立博物館所蔵の寺島良安作『日本図』(下)

画いた大型手書き彩色一枚図の『日本図』が現存している²¹⁾ので、それと照合すると図版での奥羽の図形の特徴はそのままである。ただ図版では日本全体を頁面に収めるため九州が南北に圧縮されたことを見て取れる。そのためこの手書き日本図の九州部分を『海東三国図』の九州と比べるとその図形は驚くほど類似している。したがって内容については後段で比較検討してみる。

(2) 内容

地勢の表現では山地を緑色、海・川・湖には藍鼠色を用い、河川水系の精細な描写が目立つ。既述のように山地は日本近世の地図に見られるような山々の個別的描写ではなく、「へ」の字型の山々を連続させて山脈風に描く朝鮮製古地図に特有な表現法を用いてい

る。富士山もわが国の近世絵図にみるような固有の姿ではない。山河の名称は名の知れたものに限らず中小のものにまで及んでいる。試みに関東地方をみると山名では筑波山・日光山・足柄山・黒駒山・富士山など、河川では角田川(隅田川)・入間川・神野川などの名称が目にとまる(図5)。

わが国の近世日本図は公用図であれ刊行図であれ、国内の国々を区分するのが一般的であるが、本図においても薄桃色の界線を引いて区分し逐一国名を記載している。

交通路は陸路と海路とも朱線で明瞭に表されている。幕府道中奉行管轄の五街道のほか山陽道・山陰道・北国街道・長崎路・伊勢路など地方の主要道も示されている。ただ四国では高松から丸亀を経て高知へ通ずる土佐北街道の一筋を表すのみである。海路は太平洋側では陸奥～江戸、四国と九州の南岸には見えないが、日本海側は陸奥から九州までの全ルートが通じている。海路ではとくに朝鮮からわが国の江戸へ至る朝鮮通信使のルートがとくに注目される。

離島は日本海側では佐渡と隠岐のほか長門のはるか沖合に箕島(見島)がみられ、いずれも本土からの船路が引かれている。肥前の近海には五島、平戸島、宇久島、島原、天草などがあり、いずれも長崎より船路が通じている。九州の南には種子島と屋久島があって、両島へは薩摩の山川湊から船路が出ている。離島についての描写はとくに西日本において詳細である。太平洋側には伊豆半島の先に大島と伊豆七島があり、そのはるか南方に八丈島を画いているが船路はなく「距大島六十里」と注記するのみである。

図中の地理情報は沿道を主にして地名記載の濃密さが特徴的である。集落地名ばかりでなく、自然では山・川の名称記載も多いのに対して、神社仏閣などの名称記載はほとんど見受けられない。

集落地名ではやや大きな赤色の口印で示す

地名が目立っていて、その他多くが青色の小さい○印で示されている。城下町を四角形で示す図式は近世日本図では一般的であるが、本図での赤色□印は必ずしもすべてが城下町を想定しているとは考えにくい。ただ、江戸・大坂・京の3都はやや大きな四角形で表現していて、他の赤色□印とは異なり黄色で塗っている。

(3) 朝鮮より日本への海路

朝鮮の都である京（漢城）から日本の江戸へ至るルートは陸路と海路をつなぐ朝鮮通信使の往来路であって、北上して清の皇城（北京）へ至る燕行使道と合わせて本地図の主要な内容であるとみなされる。

京より嶺南大路で南下して半島南端の東萊（釜山）へ至り、そこから日本へ向けての海路が示されている。対馬までの海上距離は「四十八里」と記している²²⁾。海路は対馬北端の鰐浦に着き、東海岸の浦々を小刻みに寄港して府中（厳原）に至っている。航路の傍には「自鰐浦至府中二十五里」とある。対馬から壱岐までも釜山までと同じ48里と記している。朝鮮の里数は既に述べたように日本の1里が10里に相当するが、本図に記載の里数はすべて日本の里数によっている。

江戸へ向かう海路には途中の寄港地ないしは目標地間の里数が順を追って逐一記されている。対馬・壱岐を経た海路は平戸島まで13里、平戸の河内より肥前の名護屋まで13里、同所には「順風四五日可至寧波府，六七日可至天津，八日可至登州」と注記があって、名護屋より中国3都市への航行所要日数を記している。この名護屋より中国の寧波・天津・登州（登萊）3都市への渡海日数については『和漢三才図会』にもまったく同じ記載が出ていて注目される²³⁾。名護屋から姫島へ7里、そこから藍島へ14里、地島へ7里、山家へ7里、次の8里で関門海峡の赤間関に至る。

赤間関から瀬戸内海に入っても、鱈崎へ2里、本山へ5里、水崎へ3里のごとく順次小刻みに里数を記し、主たる寄港地の室積・鎌刈・鞆浦・下津井・室津などを経たあと明石海峡を通過して大坂に至っている（図7）。朝鮮通信使の順路は大坂で川御座舟に乗り換えて、淀川を遡航し、伏見で下船したあと東海道の陸路で江戸へ向かうのが通例であった。だが本図では里数を記す航路が大坂からさらに先へのび、紀伊半島を廻って江戸へ向かう東海廻り航路が示されている。

日本の沿岸にはこの江戸へ向かう瀬戸内海航路と東海廻り航路のほかにもたくさんの航路が図示されているが、船路の里数を記すのはこの江戸へ至る航路に限られている。江戸幕府の編集した元禄日本図は沿岸部の描記が詳しい²⁴⁾ので、瀬戸内海航路と東海廻り航路について本図の場合と比較してみると、本図の里数記載がより小刻みなことが知れる。瀬戸内海航路では周防の向島～室積間の13里を除けばすべて7里以内の短さで、とくに2～3里の短い間隔での里数記載が多い。

本図に記される船路の里数が元禄15（1702）年成立の元禄日本図より小刻みであることから、本図はそれより内容の古さを思わせる。このような小刻みな航路の里数記載はわが国の近世日本図では見だせず、何に依拠して記載したかは不明である。

(4) 端書

日本の太平洋側海中には縦書きの端書があって、日本国土の東西南北の広がりや五畿七道区分による各州（国）の郡数が列挙されている。端書の最初の部分のみを示せば次の通りである。

日本自徐市渡海後至隋始通中国其沿革語多吊説故不録

東至矢田海岸三十五里

西至長門州二百九十三里



図7 『海東三国図』部分、瀬戸内海航路

南至品川海岸三里
 北至尻矢崎二百七十里
 西南至山川三百八十里 日本之十里，即我国之百里
 其国分為八道道有州有郡
 畿内道五州
 山城領八郡
 大和領十五郡
 河内領十六郡
 和泉領四郡
 摂津領十二郡
 東海道十五州
 伊賀領四郡
 志摩領二郡一島
 尾張領八郡
 三河領八郡
 西海道十一州
 (中省略)

薩摩與浙江相對三百五十里，順風四五日
 可到寧波
 對馬島與釜山相對四十八里，順風一日可
 到
 自薩摩至琉球二百八十里
 至台灣六百四十里
 至安南一千四百里
 至占城一千七百里
 至呂宋八百余里

冒頭の緒言によると、日本はいわゆる「徐福」(徐市)の渡来があって以来隋との通交をはじめ中国との関係も多くて、その沿革は語り尽くせない。したがって日本の沿革についての説明は省くと前置きしている。

次いで日本国土の東西南北の大きさを江戸からの里数で表している。東の「矢田海岸」は常陸の鹿島灘に面する箇所、北の「尻矢

崎」は下北半島である。続いて五畿七道を分けて六十余州各国の郡数を記している²⁵⁾。最後に薩摩から琉球、台湾、安南、占城および呂宋への海上里数を掲げている。

朝鮮王朝側のわが国についての地理情報は朝鮮初期以来、日本との交流を通じて数多く伝わっていた。とりわけ足利政権下に倭寇対策を求めて来日した申叔舟の『海東諸国紀』(1471)をはじめ、秀吉の朝鮮侵略時に捕虜となって日本に拘束されていた姜沆の『看羊録』(1656)などは、地図をも付して日本の国情を知る基礎的資料であった。徳川政権下で朝鮮通信使として来日した使節らによる「日本使行録」²⁶⁾なども数多く、この端書に掲載されるような日本の地理的情報は必ずしも目新しいものとは思えない。

ただ江戸から国土の東西南北端の距離を示すのは近世日本図では見慣れない地理認識である。諸国の郡数を示すのに「山城領八郡」のごとく「国」を「領」と記していて両者の違いが認識されていない。また薩摩より異国への海上里数を示しているが、この種の情報は日本では長崎を起点にして記するのが通例である²⁷⁾。したがって、日本図に付すこの端書は和製日本図からの転載とは思えない。

(5) 寺島良安『和漢三才図会』と内容の比較検討

『和漢三才図会』に載る「大日本国之図」は日本六十余州の国分けに過ぎないが、別途掲載の国図ないし地域図には地名の記載が充満している。それらに記される地名を『海東三国図』の日本図と比べると地名記載がかなり似通っていることに気付く。地名は両者とも共通して□印で表すものと小さい○印で示すものに分けられている。図中には地名とともに山名と河川名の記載がみられるものの、神社仏閣名はほとんど記載がない。両者の地名記載を全国的に照合するにはあまりにも煩雑であるので日本の北端と南端を比較してみ

る。『海東三国図』の日本図には北端の陸奥津軽領内に18個の地名が記されている。『和漢三才図会』の「陸奥出羽之図」の津軽部分にも21個あって、前者の地名で判読しにくいものを除くとほぼ後者に含まれる地名である。

他方、南端の大隅国の屋久島・種子島を具体的に図上で比較してみたのが図8である。『海東三国図』には種子島に8、屋久島に10個の地名を記していて、『和漢三才図会』の九州図に記される地名は種子島に12、屋久島に10個である。前者に記す地名のすべてが後者の記す地名のうちに含まれている。一部に誤写や省略などのあることを考慮すると、両者はほぼ一致しているように思える。

『海東三国図』の余白には全国各州(国)別の郡数が列記されているので、それを『和漢三才図会』に記す国別の郡数、さらに江戸幕府の正保および元禄郷帳と比較してみた(表1)。すると幕府の郷帳とは数値の違う国

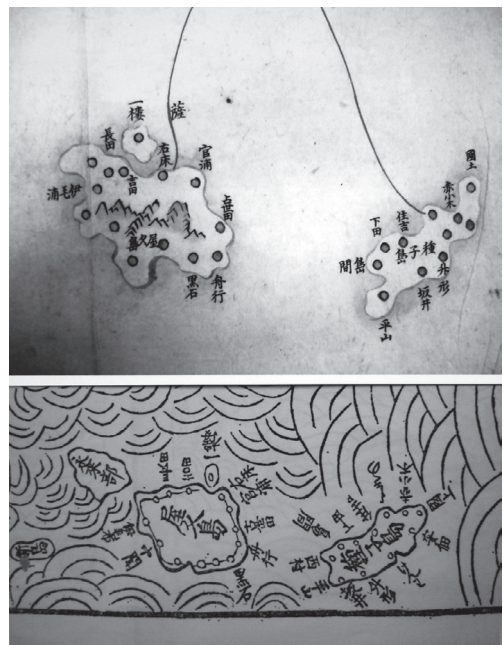


図8 種子島・屋久島の地名比較『海東三国図』(上)と『和漢三才図会』の九州図部分(下)

表1 日本国別郡数の比較

	国	海東三国図	良安図	正保郷帳	元禄郷帳		国	海東三国図	良安図	正保郷帳	元禄郷帳	
畿内	山城	8	8	8	8	山陰道	丹後	5	5	5	5	
	大和	15	15	15	15		丹波	6	6	6	6	
	河内	16	16	16	16		但馬	8	8	8	8	
	和泉	4	3	4	4		因幡	7	7	8	8	
	摂津	12	12	12	12		伯耆	6	6	6	6	
東海	伊賀	4	4	4	4	隠岐	4	4	4	4		
	伊勢	15	15	13	13	出雲	10	10	10	10		
	志摩	2	2	2	2	石見	6	6	6	6		
	尾張	8	8	8	8	山陽道	播磨	12	12	16	16	
	三河	8	8	8	8		美作	7	7	12	12	
	遠江	14	14	12	12		備前	8	8	9	8	
	駿河	7	7	7	7		備中	9	9	11	11	
	伊豆	3	3	4	4		備後	14	14	14	14	
	甲斐	4	4	4	4		安芸	8	8	8	8	
	相模	8	8	10	9		周防	9	6	6	6	
	東山	武蔵	21	21	22	22	長門	6	6	8	6	
		安房	4	4	4	4	南海道	紀伊	7	7	7	7
		上総	11	11	9	9		淡路	2	2	2	2
		下総	12	12	12	14		阿波	9	9	13	10
常陸		12	12	11	11	讃岐		11	11	14	11	
北陸		近江	11	12	12	12		伊予	14	14	14	14
		美濃	18	18	21	21	土佐	7	7	7	7	
	飛騨	4	4	3	3	西海道	筑前	15	15	15	15	
	信濃	10	10	11	10		筑後	10	10	10	10	
	上野	14	14	14	14		豊前	8	8	8	8	
	下野	9	9	9	9		豊後	15	8	8	8	
	陸奥	54	54	57	52		肥前	11	11	11	11	
出羽	12	12	14	12	肥後		15	14	14	14		
北陸	若狭	3	3	3	3		日向	5	5	5	5	
	越前	12	12	12	8		大隅	9	8	8	8	
	加賀	4	4	4	4		薩摩	14	14	14	13	
	能登	4	4	4	4		壱岐	2	2	2	2	
	越中	4	4	4	4	対馬	2	2	2	2		
	越後	7	7	7	7							
	佐渡	3	3	3	3							

注：正保郷帳は和泉清司『近世前期郷村高と領主の基礎的研究』（岩田書院、2008）、元禄および天保郷帳は「元禄・天保御国高」（内閣文庫所蔵）による。

が多いのに対して『和漢三才図会』とは3か国で異なるだけで大方は一致している。

ところで『海東三国図』の日本図には、近世の日本図にて通常城下を表す□印で示す地名の多いのが目立っていて、その数は全部で224か所に及んでいる。それら□印地名をすべて拾い出して国別に整理して一覧(表2)すると、例えば伊豆では三島・下田、伊勢では山田・松阪、信濃の伊奈(伊那)、大和の奈良、筑前の博多、肥前の長崎など、明らかに城下ではない地名が多く混入している。

『和漢三才図会』に記載の国図ないしは地域図にて□印で示される地名は全部で156か所であって、すべてが城下町に限られている。『海東三国図』の日本図に示される□印地名は『和漢三才図会』に示される城下町をそのまま写したものではないようである。城下町の外にも名の知れる町や交通要所などを□印地名の中に加えている。『海東三国図』では近世日本の絵図にて□印が城下を表す記号であることの認識がないまま、本来の城下町に限らず重要と思われる地名を□印で示したものと考えられる。

ところで本図の□印地名のうち本来の城下町の中でとくに新規立藩による城下に注目すると、17世紀後半に成立した城下には明暦3(1657)年の伊予吉田、寛文6(1666)年の出雲広瀬、同9(1669)年の伊勢久居、天和2(1682)年の近江水口があって、これらはいずれも赤色□印にて図示されている。他方、天和2年成立の常陸宍戸、元禄10(1697)年の播磨三日月、同年の備中新見、同13(1700)年の下総結城は□印としては図示されていない。つまりこのような城下町の図示状況から判断すれば、『海東三国図』に画かれる日本図の原拠図はおおよそ天和初年から元禄10年頃(1680~1700)までに成立したものであろうと推定される。

本図に画かれる日本図は図形および内容からも寺島良安の『和漢三才図会』との関連が

察せられる。そのことからこの『海東三国図』の中の日本図は恐らく寺島良安の作品を参照して画かれた可能性が推定されるのである。

寺島良安の『和漢三才図会』は正徳3(1713)年頃に刊行されている。良安はこの105巻にも及ぶ膨大な百科事典を書き上げるのに、およそ30余年もの歳月をかけたと自序にて述べている²⁸⁾ので、この事典に収められた地図の内容と刊行年に生じる多少の年次差は許容できるであろう。

VI. むすびにかえて一本図の成立と朝鮮の東アジア地理観の変化一

朝鮮王朝時代(1392~1910)の古地図の中には中国・朝鮮・日本・琉球の4か国を範囲とする東アジア図を少なからず見ることができる²⁹⁾。それに対して近世日本の側では、海をはさんで朝鮮・中国までを含めた地図は林子平の『三国通覽輿地路程全図』天明5(1785)年が知られる程度で少ない。朝鮮は地理的には中国と陸続きで文化的にも中国との関係が強く、自らを「東国」と呼び中華と一体視し、その東南に海を隔てて位置する日本と琉球を古くから海東の「小国」としてとらえていた。この一衣帯水の地域を一体的な範囲とみる小中華意識による地理認識が朝鮮でははやくからめばえていたのである³⁰⁾。ところが17世紀に大陸で宗主国とあおぐ明が倒れて女真による清が建つと伝統的な華夷認識が揺らぎ、従来の地理観にも微妙な変化が生じたことに気付かされる。

朝鮮初期においては『混一疆理歴代国都之図』(1402)の成り立ちと同じように、中国の地図を主軸にし、それに朝鮮半島をつなぎ、東に日本、南に琉球を加えて現在の東アジアに相当する地域を一枚に画いたやや大きな「天下輿地図」系地図が継続して作られていた³¹⁾。この伝統的な「天下輿地図」系地図に用いられた中国図はいずれも明代の伝統的

表2 日本図中の□印地名一覧

	国名	城 下		国名	城 下
畿内	山城	京	山陰道	丹後	峯山 宮津 田辺
	大和	郡山 奈良 高取 柳本 美樹		丹波	亀山 園部 氷上 山家 篠山 福知山 綾部
	河内	狭山		但馬	豊岡 出石
	和泉	岸和田		因幡	鳥取
	摂津	大坂 尼崎 高槻		伯耆	米子
東海	伊賀	上野	出雲	松江 広瀬	
	伊勢	松坂 山田 桑名 亀山 久居	石見	津和野 浜田	
	志摩	鳥羽 長島	播磨	姫路 明石 林田 竜野 宍粟	
	尾張	名護屋 犬山	美作	津山	
	三河	岡崎 吉田 田原 刈谷 西尾 大崎 伊保 拳母	備前	岡山	
	遠江	浜松 懸川 横須賀	備中	松山 川辺 芦森 庭瀬	
	駿河	駿府 田中	備後	福山 三原 三次	
	伊豆	三島 下田	安芸	広島	
	甲斐	甲府 谷村	周防	徳山	
	相模	田原(小田原)	長門	萩 長府	
	武蔵	江戸 川越 巖築(岩槻) 忍	紀伊	和歌山 新宮	
	安房	東条 北条 梶山(勝山)	淡路	本(洲本) 由良 岩(岩屋)	
	上総	佐貫 勝浦 大滝	阿波	徳島 池田	
	下総	関宿 古河 生実 大輪田(大輪) 小松	讃岐	高松 丸亀	
	常陸	水戸 笠間 下館 土浦 鹿島 矢田部 房 内(保内)	伊予	松山 宇化島(宇和島) 大洲 吉田 今治 西条	
東山	近江	彦根 水口 仁政寺(仁正寺)	土佐	高知	
	美濃	岩村 加納 苗木 郡上	筑前	福岡 博多 秋月	
	信濃	飯田 伊奈 高遠 諏訪 松本 松城 古諸 上田 飯山 須坂	筑後	久留米 柳川 三池	
	上野	高崎 安中 坂本 厩橋 伊勢崎 沼田 七 日市 小幡 館林	肥前	佐賀 唐津 大村 島原 長崎 五島	
	下野	宇都宮 大田原 壬生 黒川	肥後	熊本 八代 天草	
	陸奥	弘前 盛岡 八戸 一関 石巻 平泉 仙台 中村 福島 二本松 郡山 □(三春カ) □(白石カ) 白川 棚倉 本宮 巖城 若松	豊前	小倉 中津	
	出羽	秋田 大館 本庄 亀崎 府内(庄内) 新庄 山形 府内 上野山 米沢	豊後	日出 府内 佐賀 白杵 佐伯 森崎	
北陸	若狭	小浜	日向	縣 財辺 佐土原 飢肥	
	越前	福井 松岡 府中 大野 敦賀	薩摩	鹿兒(鹿兒島) 山川	
	加賀	金沢 大正持	沓岐	風本	
	能登	七尾 河尻 水崎	対馬	対馬島	
	越中	富山 高岡			
	越後	高田 柏崎 新潟 長岡 與坂(與板) 村上 村松 柳生			
	佐渡	小木			

な地図を原本として、朝鮮を大きく描き直していた。

朝鮮中・後期には木版印刷の発達とも関係して小型の「天下図」系地図帖が盛行した³²⁾。この種小型地図帖は空想的な円形世界の「天下図」を巻頭の飾りにするが、本体は中国・朝鮮・日本・琉球の各国単独図に朝鮮八道分図(8図)を合わせた計13図を基本³³⁾とする図帖形式の東アジア図であった。表題は「天下図」「地図」「九州図」「輿地図」など様々で一定していない。この種小型地図帖は韓国だけでなく日本や欧米にも伝わっていて、わが国では天理図書館や神戸市立図書館などに多数所蔵されている。

この「天下図」系地図帖に所収の日本国図は稚拙な行基図であって、いずれも南を天に配していた(図9)。中国図に比べると日本国図は輪郭ばかりでなく内容も貧弱であって、当時朝鮮の人々の日本に対する関心の低さと文化的交流の少なさを証拠づけている。時を経てわずかに修正されても大きな進展がないまま、このような日本国図が19世紀初期まで長らく板行、模写され続けていた³⁴⁾。17~18世紀になれば日本では流宣図や赤水図など形の整った日本図が少なからず板行されていたにもかかわらず、朝鮮製地図にはその影



図9 「日本国」(帖『九州図』韓国国立中央博物館所蔵)

響がまったく見受けられない。

18世紀になると朝鮮では一部にこの「天下図」系地図帖にも変化があらわれる。例えば奎章閣所蔵の『輿地図』はやや大型の新しいタイプの地図帖である³⁵⁾。全体は「天下都地図」(万国全図)「我国総図」(朝鮮全図)、「八道分図」「都城図」「朝鮮・日本・琉球国図」「入燕程途図」の13図から成るが、旧来の「天下図」系地図帖とは内容構成が異なっている。

この地図帖ではかの空想的な円形「天下図」に代わって巻頭には艾儒略(ジュリオ・アレニ)の万国全図を写した世界図³⁶⁾を配し、単独の中国図も姿を消している。そして新たに朝鮮・日本・琉球の3国を合わせて一枚に画いた「朝鮮・日本・琉球国図」(図10)が登場している。この新しい構図の三国図では図形の進展した鄭尚驥「東国地図」タイプの自国(朝鮮)を中央に配して、中国は図面

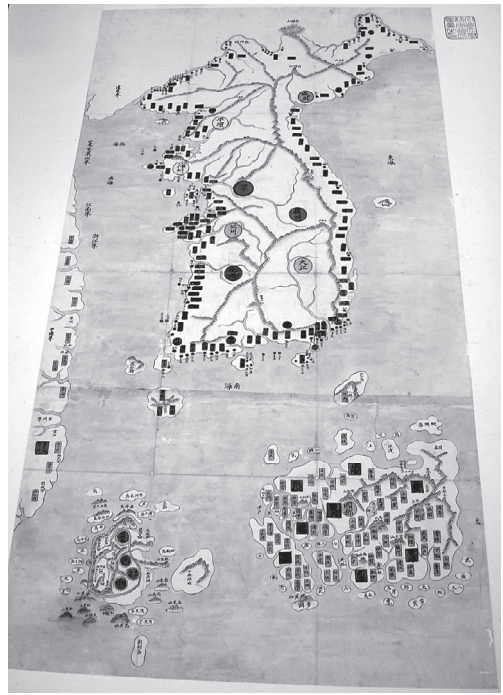


図10 「朝鮮・日本・琉球国図」(帖『輿地図』奎章閣所蔵)

の西端にかろうじて沿岸部を画き入れるだけである。そして中国全図を省いた代わりに、新たに中朝国境から清の皇都（北京）へ至る「入燕程途図」（図11）を別個に加えている。このような「天下図」系地図帖の構成変化は、中国を世界の中心として把握した中華主義世界観の崩壊と漢訳西洋知識による新たな世界観の芽生えを読み取ることができる。

ところでこの新しい地図帖で新たに登場した「朝鮮・日本・琉球国図」と「入燕程途図」を合わせた構図は、本稿で取り上げた『海東三国図』にほぼ同じであることに気付かされる。このような新しい構図の東アジア図の成立は、朝鮮における伝統的な東アジア地域（海東地域）についての地理認識の変化を思わせる。ただ、この「朝鮮・日本・琉球国図」では日本と琉球は旧来図の天・地の方向を転じて画き変えただけで、図形の進展はなく朝鮮半島に比して矮小なままであった³⁷⁾。

ところが当該『海東三国図』は地図帖の収載図ではなく大型の単独一枚図であって、日本を実状のごとく大きく画き、中国東北部と沿岸の輪郭は西洋知識による科学的な測量の成果を受け入れて、客観的な東アジア図となっている。しかも北京から江戸まで陸路と海路をもってつなぎ、朝鮮の京（漢城）を中心に東アジアを一つの連続面として表現した

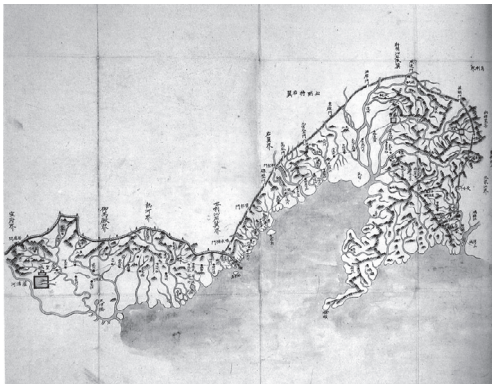


図11 「入燕程途図」（帖『輿地図』奎章閣所蔵）

地理認識が意義ぶかい。

このような東アジア図の成立は18世紀末期に至り朝鮮における儒教的民族主義の高まりと日本認識の変化を反映しているように思われる。朱子学を国是とした朝鮮では自国こそ儒教文化を受け継ぐものとの自意識を強めるようになり、そのような思潮の高まりは正祖（在位1777～1800）の治世下が最盛期であったという³⁸⁾。大陸での王朝交代による伝統的な華夷観の崩壊に伴い、日本に対しては従来の夷狄観の非現実性が自覚されるようになった。壬辰・丁酉の倭乱（文禄・慶長の役）から一世紀余が過ぎると倭乱をひとつの歴史的事実として客観化できるようになったのと同時に、朝鮮通信使の日本使行録などによって日本社会が客観的に紹介されるようになった結果と考えられる。

本稿でとり上げた『海東三国図』は、18世紀末に朝鮮において高まった自国を中心とする儒教文化圏を想定した地理認識をもって作製された東アジア図であると解釈できよう。

〔付記〕

本稿は2011年6月の第54回歴史地理学会大会において報告した内容を再構成したものである。ソウル大学校奎章閣での資料調査では誠信女子大学校教授楊普景女史のお世話を受けた。「海東三国図」の画像データは京畿道立実学博物館主任研究員金成煥氏により便宜を受けた。両者に謝意を表します。

〔注〕

- 1) 李氏朝鮮王朝の宮廷文庫。古くは景福宮に所在したが、現在はソウル大学校の所管。
- 2) 川村博忠「放置していた李燦先生との約束」国絵図ニュース26, 2011, 4頁。
- 3) Description of Exhibit Collections.
- 4) 『奎章閣所蔵朝鮮全図』ソウル大学校奎章閣, 2004。
- 5) 李祐炯・呉尚學「国立中央博物館所蔵『朝鮮地図』の地図史的意義」文化歴史地理16

- (1), 2004, 165-181頁。
- 6) ①山田正浩「朝鮮時代の地図に描かれた日本」奈良大地理16, 2010, 42-55頁。②川村博忠「李朝時代の天下図系地図帖に所収の日本国図について」エリア山口40, 2011, 1-8頁。
- 7) 鄭尚驥は朝鮮全図『東国地図』を作製するのに百里尺を採用してはじめて縮尺の概念を明確にした。全相運『韓国科学技術史』高麗書林, 1978, 349-350頁。
- 8) 楊普景・渋谷鎮明「日本に所蔵される19世紀朝鮮全図に関する書誌学的研究—『大東輿地図』および関連地図を中心に—」歴史地理学45-4, 2003, 17頁。
- 9) 金泰俊『虚学から実学へ—十八世紀朝鮮知識人洪大容の北京旅行—』東京大学出版会, 1988, 1-3頁。夫馬進「日本現存朝鮮燕行録解題」京都大学文学部研究紀要42, 2003, 127-167頁。
- 10) ①吉田金一「清の柳条辺牆について」東洋学報59-1・2, 1977, 1-25頁。②川久保悌郎「柳条辺牆管見」東洋学報71, 1990, 4-5頁。
- 11) 前掲10) ①15頁。
- 12) 船越昭生『鎖国日本にきた「康熙図」の地理学史的研究』法政大学出版局, 1986, 19-27頁。
- 13) 筆者が1986年ウイーン大学およびオーストリア国立図書館にて在外研究中に撮影したもの。
- 14) 李燦著, 山田正浩・佐々木史郎・渋谷鎮明共訳『韓国の古地図』解題, 汎友社, 2005, 537頁。鄭尚驥の「東国地図」はすべて筆写本で道別図と全国図から成るが, 全国図は数少なく、『奎章閣所蔵朝鮮全図』(前掲4)所収の図版58は「東国地図」タイプの代表的な地図とされる。同図版の解説参照。
- 15) 百里尺では原則として100里を1尺で表す。ただし朝鮮の100里は日本の10里に相当する。つまり日本では10里を1尺(1里1寸)ということになる。
- 16) 長森美信「朝鮮近世海路の復元」朝鮮学報199・200合併号, 2006, 151-190頁。
- 17) 金炳周・西垣安比古「朝鮮の大路と邑治の連結関係に関する研究」日本建築学会計画系論文集75-648, 2010, 487頁。
- 18) 轟博志「韓国における歴史遺産を活用した観光マーケティング—聞慶市の古道を事例に—」立命館地理学17, 2005, 41頁。
- 19) 申叔舟『海東諸国紀』(岩波文庫), 岩波書店, 1991。
- 20) 寺島良安『和漢三才図会』1~18(東洋文庫), 平凡社, 1988。日本地理に関しては9~14に収載。
- 21) 神戸市立博物館所蔵, 寺島良安作『日本図』, 享保13年, 180.2×265.0cm。
- 22) 寺島良安の手書き『日本図』でも対馬より朝鮮の釜山浦へ船路を引いて「四十八里」と同じ里数を記している。江戸幕府撰『正保日本図』写(再製図)にも対馬より「朝鮮釜山浦迄四十八里」とある。その他『本朝図鑑綱目』貞享4(1687)年など刊行日本図の多くには対馬~釜山間を48里と記すが, 森幸安の『日本分野図』宝暦4(1754)年は25里と記している。
- 23) 『和漢三才図会』14(東洋文庫本)の対馬の項に「壱岐より名護屋島まで九百余里, 名護屋は肥前の地, 壱岐よりおよそ十六里ばかり。唐にいう九百里は日本では九十里くらいであり相違がある。名護屋より順風であれば四, 五日で寧波に行き着くことができる。六, 七日で天津に至る。八日で登萊(東萊, 山東省)に至る。ただし登萊などの海は石や磯が多く, 舟を進めるのに不便である」と説明している。
- 24) 川村博忠「江戸幕府撰元禄日本図の内容とその切写図について」人文地理60-5, 2008, 1-22頁。
- 25) この端書に記される国別郡数を正保および元禄郷帳と比較すると, 20数か国で違いがある。
- 26) 河宇鳳『朝鮮王朝時代の世界観と日本認識』明石書店, 2008, 265-268頁。
- 27) 本図に記す異国への里数は, 長崎を起点とするわが国通例の里数とも数値が異なっている。わが国の各種日本図に記す長崎を起点とした異国への里数は台湾(高砂)へ580里, 呂宋(ロソン)1, 112里, 安南(カン

- ホチア) 1,500里などである。
- 28) 著者が「正徳二壬辰歳五月上浣」の年記をしるす本書の自序にて「医業のかたわら和漢の古書を渉獵し、耳学問によって得た知識、言い伝えなど探し求めつづけてかれこれ三十有余年、(中略)かくしてまさにいま百五巻の書が完成した」と書いている。
- 29) 高橋公明「『混一疆理歴代国都之図』と『海東諸国総図』」(荒野泰典他編『倭寇と日本国土』吉川弘文館, 2010), 273-285頁。
- 30) 前掲26) 26-31頁。
- 31) 前掲14) 480-482頁参照。その代表的なものとしては朝鮮中期頃の崇実大学校博物館所蔵『天下輿地図』や国立中央図書館所蔵『天下摠一覽之図』などが挙げられている。
- 32) ①海野一隆「朝鮮李朝時代に流行した地図帳一天理大学図書館所蔵本を中心に」『ビブリア70, 1978, 2-28頁。②同「李朝朝鮮における地図と道教」東方宗教57, 1981, 14-36頁。前掲6) ②1-4頁。
- 33) 前掲6) ②1頁。前掲32) ①6頁。
- 34) 前掲6) ②2-6頁。前掲32) ①1~13頁。前掲29) 282~284頁。
- 35) 前掲14) 収載の図版84 (128頁) およびその解説 (538-539頁)。前掲6) ②6-7頁。
- 36) 『職方外紀』の付図で、利瑪竇(マテオ・リッチ)の世界図と同じ楕円形世界図。
- 37) 前掲6) ②7頁。華夷思想の継続を思わせる。
- 38) 山内弘一「朝鮮を以って天下に王たらしむ」東洋学報84-3, 2002, 1-31頁。末木文美士「東アジア三国の儒と仏」(荒野泰典他編『倭寇と「日本国王」』吉川弘文館, 2010), 326頁。

About an East Asia Map titled *Kaito-sangokuzu* that is owned by
the Kyujanggak Archives of Seoul National University

KAWAMURA Hirotada

Several old maps are owned by the Kyujanggak Archives (奎章閣) of Seoul National University, which is the library of the Li-regimed Korea Dynasty. The inventory includes an East Asia map titled *Kaito-sangokuzu* (海東三国図). This map covers China, Korea, Japan, and Ryukyu, but includes only the figure of the northeastern region (Manchuria) of China and the coastal area of East China Sea. According to the commentary of the Archives, it is estimated that this map was prepared in the later 18th century by the private cartographer Cho'ng Hu-jo (鄭厚祚). **However, the description only focuses on facets concerned with the map of Korea, and there is no explanation about Japan.**

Usually, although Japan is depicted as small and approximately comparable to Korea in maps made during the age of the Korean Dynasty, Japan is portrayed as larger than Korea in this map, which is extremely rare for old maps made in Korea. In this map, the geographical description of Japan is detailed as compared to those of Korea or China. The names of several places are mentioned all over the Japanese figure, and land and sea routes are elaborately drawn. Castle towns are distinguished from general villages and towns, and are specifically illustrated with a red quadrangle. About 230 castle towns are shown in this map.

Although a Japanese figure closely resembling the abovementioned cannot be found in maps made in Japan during the Edo period, the figure in the map seems barely similar to the figure of Japan that is placed in the encyclopedia of Ryoan Terajima (寺島良安). It is estimated that the original drawing of Japan of the *Kaito-sangokuzu* was described with reference to the map of Ryoan Terajima, which was drawn at the beginning of the 18th century in Japan.

It is significant that the *Kaito-sangokuzu* illustrates a land route to Beijing and a sea route to Edo from the Korean capital, and it is depicted as a continuous side in East Asia. Based on this facet, it can be assumed that a change had occurred in Korea's traditional geographical outlook toward East Asia. Owing to this changed outlook, this new type of figure in the map of East Asia was drawn in Korea at the end of the 18th century. In China, the Ming dynasty, to which Korea had looked up as the suzerain, had fallen, and the Qing dynasty had arisen. Korea had become strongly self-conscious of being a center that had inherited Confucianism. Conversely, the unrealistic outlook toward Japan could become evident through reports on Korean-Japanese missions and other information concerning Japan.

Key words: Kyujanggak Archives, Li-regimed Korea Dynasty, *Kaito-sangokuzu* (海東三国図)
Cho'ng Hu-jo (鄭厚祚), map of Japan